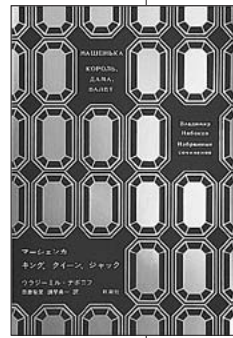


ウラジーミル・ナボコフ著・奈倉有里・諫早勇一訳
ナボコフ・コレクション

『マーシエンカ／キング、クイーン、ジャック』

新潮社、二〇一七年

梅垣昌子



ナボコフの磁界は濃密だ。一旦その迷宮に足を踏み入れると、そこで永遠に彷徨することが快楽になる。ナボコフのラビリンスでは、一度通った道に再会した時点でもう、その様相が変化している。この冒険はやみつきになる。ナボコフの放った不可思議な蝶をひらひら追いかけるうち、現実と幻影の境界線が消える異次元の森で、読者自身も変容をとげるのだ。

ナボコフの没後四〇年の今年、日本初のコレクションの刊行が始まった。記念すべき第一巻には、亡命作家ナボコフがベルリン時代にロシア語で執筆した二作品が収められている。いずれもロシア語原典からの初の邦訳である。

奈倉訳の『マーシエンカ』（一九二六）には、ベルリンの亡命ロシア人たちの悲喜交々の日常や人間模様が織り込まれている。「影たちの宿舎」で無為な時間を過ごし、「意思の霧散」に苦しむ主人公のガーニンは、ある日を境に、生まれ故郷のロシアで出会った初恋の少女マーシエンカとの記憶の世界を彷徨い始める。「いちどは滅んだ世界をよみがえらせる神」となったガーニンは「モノクロームの憂鬱」から脱し、回想の異次元空間の住人となるかに見えたが、最終的には過去と決別して「薄桃色の光沢」が輝く現実世界に帰郷し、人生の次のステージへと旅立ってゆく。奈倉氏による巻末の作品解説では、この処女作に蒔かれたナボコフの「技巧やモチーフの種」が鮮やかに示されている。鱗翅学者ナボコフが用いた蝶の比喩とマーシエンカのリボンの

髪飾りに関する考察など、興味深い内容が詰まっている。

諫早訳の『キング、クイーン、ジャック』（一九二八）は、ドライヤー、マルタ、フランツの三人が同じ列車の車両に乗り合わせるところから物語が動きはじめる。ナボコフ自身が「入念」な作りだと後年振り返ることになるこの二作目の小説は、その冒頭から読者の空間認識の秩序に揺さぶりをかける。読者の頭上には、ずらりと放射状に並んだクエスチョンマークの扇が開くだろう。しかし、語り手の定点カメラの目はどこに仕掛けられているのか、それが明らかになると謎は一気にとけ、その歓喜が先を読み進むエンジンになる。しかも道中、燃料は次々に補給される。絶妙な比喩や、イメージの不可思議な組み合わせ、計算し尽くされたエピソードの並置などが、よくある三角関係の物語に独特の存在感を与えている。

ナボコフの語りは変幻自在で、登場人物たちの内部に自由に入り込むかと思えば、にわかに物語の箱庭の外から新しい光を人物たちに投げかけもする。夫のドライヤーに隠れて、彼の若い「甥」のフランツを愛人にし、「これは生活を飾るはずのことで、ややこしくすることではないわ」と自分に言い聞かせるマルタはやがて、フランツなしには一日として暮らせなくなり、夫の殺害を企てはじめる。『ボヴァリー夫人』や『アンナ・カレーニナ』のパロディとも読める本作では、「言葉の魔術師」ナボコフの鮮やかな手際により、リアリティは重力から解放されて特定の時空間を超越し、軽やかで透明な生き物フルイトになる。

そのナボコフが乗り移った諫早訳の軽快なリズム感は、初めてナボコフに接する読者にとっても強力なエンジンとなるだろう。例えば妻と若者が殺害計画を練る下りを見てみよう。「銃弾」や「毒」という言葉は、「たまご」や「読者」と同じように、ふつうに聞こえるようになってきた。ロシア語原典の単語が邦訳仕様に置換されている。また、諫早氏による巻末の作品解説では、今回用いられたロシア語版と英語版との違いが詳しく述べられている。作品発表から四〇年を経て、ナボコフ自身の監修のもと息子ドミトリーが英語に翻訳したのだが、英訳との差異が少ない『マーシエンカ』とは違い、本作品では英訳時にかなりの改変がなされているのだ。

『ロリータ』以前のナボコフの煌めきを存分に感じるこの第一巻を皮切りに、これから五つの宝石箱が本棚に並ぶのが待ち遠しい。